

Percyvell と 牝馬

——その喜劇性に隠された騎士の資質——

Double Roles of the Mare in *Sir Percyvell of Gales*

貝 塚 泰 幸

要 旨

14世紀中英語韻文ロマンス *Sir Percyvell of Gales* はその原典を12世紀後半 Chrétien de Troyes が著した *Perceval ou le Conte du Graal* に求められる。特筆すべき両者の違いは、*Sir Percyvell of Gales* における主人公の滑稽な人物像とそれによって創り出された作品自体が持つ喜劇性にある。とりわけ通常騎士が乗ることのない牝馬は少年 Percyvell の滑稽な人物像を創り上げることに大きく貢献している。しかし他の中英語騎士物語などと比較しながら牝馬と Percyvell とのやり取りを詳細に分析すると、牝馬というモチーフが笑いを誘う主人公の人物描写や作品そのものへの喜劇性の付与という機能を持つだけでなく、騎士物語の一つの伝統として見られる少年に生得的に備わっていた騎士としての資質を示す役割も担っていることが見えてくる。

キーワード

Sir Percyvell of Gales, Chrétien de Troyes, 騎士の資質, 牝馬, 中英語騎士物語

Sir Percyvell of Gales (以降 PG) は唯一 Lincoln Cathedral MS 91——いわゆる Thornton 写本——だけに現存する中英語アーサー王ロマンスである。この作品は Geoffrey Chaucer の *Sir Thopas* の物語や *Laud Troy Book* に主人公 Percyvell への言及があることから¹⁾、14世紀以降のイングランドにおいて人気を博していたことが窺える。中世後期のイングランドにおいて Chaucer が言及するほどによく知られた作品であった一方で、PG は中世英文学研究の対象としての存在感はかなり希薄で、ともすれば作品の筋書き自体があ

まり知られていないかもしれない。それが *Ywain and Gawain* のように、12世紀後半に Chrétien de Troyes が著した古フランス語版の *Perceval* を主人公とする物語の忠実な中英語訳であると期待すると、その期待は虚しく裏切られる。多くの古フランス語作品が中英語に翻訳された時と同じように、感情の機微を表現する技巧的な叙述は割愛され、血生臭い暴力的な描写がことさらに強調されている²⁾。Chrétien の作品との比較から見えてくる中英語版の違いは、*PG* の文学作品としての面白みのなさや瑣末さを鮮明にしてしまうかもしれない。さらに *PG* においては、Chrétien の描いていない内容が追加され、*Perceval ou le Conte du Graal* ではもう一人の主人公であった Gauvain の物語が始まることのないまま、物語は無事完結を迎えている。Chrétien の物語が聖杯の登場によって宗教色が濃く謎めいているのに対して、*PG* は聖杯を始めとする神秘的な要素は皆無で Gawain が脇役になったことで筋書きは極めて単純化されている。

これまでの *PG* に関する先行研究は、その喜劇性を作り出すモチーフよりもむしろ原典との関係性について注目している³⁾。*PG* と Chrétien の作品とでは、特に *PG* の冒頭と後半部分でその筋書きが大きく異なっており、両者の顕著な相違が研究者の関心を引きつけてきたことは間違いない。その中で Caroline D. Eckhardt の研究は作品の筋書きではなく作品に導入される喜劇的な性格を持つ様々な要素の分析にその主眼に置いている点で稀有な存在である⁴⁾。本研究は Eckhardt が主人公の滑稽な人物像の形成に貢献していると指摘した題材の一つである「牝馬」が登場する場面に注目している。Chrétien の主人公は初めて騎士と遭遇した際にすでに立派な馬に乗っていた。しかし中英語版の *Percyvell* は馬を見たことさえない。初めて見る動物の名前がわからない *Percyvell* は、母親が教えてくれるだろうと騎士たちと別れた後に、飼育場で見つけた牝馬をそうとは知らずに連れ帰る。*Percyvell* の期待通りに、母親が“mere” (l. 363) と彼の乗る動物を呼ぶの

を聞いてその名前を理解する。これ以降少年 Percyvell は Gawain からその通常騎士が乗る戦馬の呼び名を学ぶまで自分の乗る馬も、また他の騎士が乗る馬も「牝馬」と呼び続けている⁵⁾。Eckhardt が指摘するように⁶⁾、この少年の間違った認識が赤鎧の騎士との対決の際に Percyvell の言動の滑稽さを強調している。この少年の無知や純朴さからくる勘違い自体も十分に面白いのだが、Eckhardt は *chanson de geste* においては牝馬に乗る男が嘲笑の的であるという Jean Frappier の研究を引用して、馬術の基本的な知識がある者たちにとっては大きな腹をした——後にこの馬が妊娠していることがわかるのだが——牝馬に乗ることもまた極めて滑稽な光景だとも指摘している⁷⁾。

Eckhardt の研究は *PG* の本質を捉えた優れた研究であることは間違いない。Percyvell と牝馬との出会う場面や Percyvell とその馬との関係は明らかにユーモラスで笑いを誘う。確かに牝馬は主人公の行動や人物像に滑稽さを与えて作品そのもののコメディ化に寄与している。しかし、他の中英語作品と比較しながら Percyvell と牝馬の描写を検証すると牝馬は作品に喜劇性を付与する以外にも別の役割を担うことで、より効果的に作品の喜劇性を高めていることがわかる。他の中英語ロマンスで見られるように、Percyvell 詩人は牝馬を通して主人公が生来的に持つ隠されていた騎士としての資質を顕在化させているように思える。本研究では、この牝馬が持つもう一つの役割について論じる。始めに Chrétien の Perceval の物語とはその節書きが大きく異なるために、あまり知られていないであろう本作品の梗概を述べる。そして中世英文学における牝馬の役割を明確にするために、他の中英語作品に描かれる牝馬とその役割について検証する。最後に主人公の潜在的な騎士の資質を読み取ることのできる Percyvell と牝馬の関係を描く場面を考察する。

1. *Sir Percyvell of Gales* 概要

a. Percyvell の誕生と父親の死 (ll. 1-176)

かつて Arthur 王の宮廷には Percyvell と呼ばれる騎士がいた。武勇に優れた Percyvell は王の寵愛を受けて、王の実妹 Acheflour との結婚が認められる。王は Percyvell に領地と財産を与え、結婚式が執り行われた。その後すぐに馬上槍試合が開催され、Percyvell はそこで60人もの参加者に勝利し栄冠を手に入れた。Percyvell が倒した参加者の中には赤鎧の騎士がおり、彼は落馬し気絶させられたことを恨み、密かに復讐することを誓っていた。

その後 Percyvell と Acheflour の間には息子が誕生し、父親と同じ名前がつけられた。Percyvell は息子の誕生を大いに喜び、祝宴と馬上槍試合を開催した。赤鎧の騎士はその知らせを聞きつけると喜び勇んで試合に駆けつけ、Percyvell の命を奪い復讐を果たした。夫を失った Acheflour は悲嘆に暮れ、息子が父親と同じ運命をたどることがないように息子と共に騎士の世界を離れて森の中で隠遁生活を始める。

b. 少年 Percyvell, Arthur 王のもとへ行く (ll. 177-600)

15年後、ある日少年 Percyvell が森を歩いていると、Gawain, Ywain, Kay と出会う。Gawain が自分たちが Arthur 王の騎士であることを教えると、Percyvell は王が自分を騎士にしてくれるか尋ねる。そのため Gawain は Arthur 王のもとへ行くことを少年に勧めた。騎士たちと別れた後、Percyvell は馬を手に入れ、母親の待つ家に帰った。Acheflour は息子に騎士になりたいという意志を告げられ落胆するが、教養のない息子に最低限の礼儀作法を教えた上で、指輪と投げ槍を与えて送り出す。

Percyvell は途中、ある館を見つけそこに立ち寄ると馬の世話と食事をした後に眠っている女性の指から指輪を抜き取り自分のものと交換して館を

出発した。

Arthur 王のもとにたどり着いた Percyvell は目的を伝える。一方で王は少年の顔にかつて自分が寵愛していた Percyvell の面影を認めて哀れみを覚える。そして王は馬から降りて食事を共にすれば叙任することを約束して、少年を席に促した。

c. 赤鎧の騎士と少年 Percyvell (ll. 601-948)

Percyvell が席につこうとした時、あの赤鎧の騎士が現れ、王の前に置かれた杯を奪い去っていった。少年は赤鎧の騎士を倒して杯を持ち帰る代わりに騎士にしてほしいと告げると、王が武具一式を用意するのも待たずに赤鎧の騎士を追って出ていく。

Percyvell はすぐに赤鎧の騎士に追いつき呼び止めると、揚げた面頬の隙き間に槍を投げつけ殺してしまう。少年は鎧を脱がそうと試みるが上手くできずに鎧もろとも騎士を焚火に投げ込もうとしているところに、Gawain がやってきて Percyvell に鎧をつけてやる。Percyvell は杯を Gawain に託すとその場を離れていった。

Percyvell が最初に出会ったのは赤鎧の騎士の母親の魔女であった。Percyvell は魔女が赤鎧の騎士の母親であることがわかると、騎士を投げ込んだ火の中に母親もまた投げ込んで殺してしまう。

その後 Percyvell は赤鎧の騎士に狙われていた老騎士とその 9 人の息子に出会う。彼らは赤鎧の騎士が倒されたことを知ると、彼らの城で Percyvell をもてなした。

d. Lufamour 嬢の救出 (ll. 949-1759)

Percyvell が老騎士の城で食事をしていたところに、Arthur 王に救援を求める Lufamour 嬢からの使者が立ち寄る。Percyvell は彼女が異教の王

Gollrotherame に苦しめられていることを聞いて Lufamour 嬢のいる Maidenland に向かった。一方使者は Arthur 王のもとにたどり着いて Lufamour 嬢からの書簡を渡す。Arthur 王は Percyvell が去ったことで落胆していたが使者の話から Percyvell が Lufamour 嬢救出に向かったことを知り、Gawain らを引き連れて Maidenland に向かう。

Percyvell は一足先に Maidenland にたどり着き、異教の王を一目見ようと異教の兵士らの中に入っていく。Percyvell が敵だとわかると兵士たちは戦いを挑むが全滅してしまう。その後 Percyvell は休息のために城壁の下で眠りにつく。翌朝、城の見張りが Percyvell を発見して Lufamour 嬢に報告すると、この女主人は侍従 Hatlayne をやって Percyvell を城内に招き歓迎する。Percyvell は敵が丘の上に集結しているとの報告を聞き、わずかな食物を口にして異教の軍隊を迎え撃つ。

Percyvell がすべての敵を倒したところに Arthur 王一行がやってくる。Percyvell が突進してきたため Gawain が相対するが、言葉遣いで相手が Percyvell だとわかると戦いを中断し再会を果たす。一行は Lufamour 嬢によって歓待され、さらに Arthur 王は Percyvell の素性について Lufamour 嬢に明かす。翌日、異教の王 Gollrotherame が兵を率いて再び現れ一騎打ちを申し出る。Percyvell は Arthur 王に騎士に叙任されると Gollrotherame との一騎打ちを制し、勝利と Lufamour 嬢、そして領地を手に入れた。

e. Percyvell と母親の再会 (ll. 1760-2287)

Gollrotherame との一騎打ちから 1 年が過ぎたころ、Percyvell は突然母親のことを思い出し、母親探しの旅に出発する。途中、手足を木に縛り付けられた女性を助けると、それが 1 年前に自分が指輪を交換した女性であり、また自分が指輪を交換したために怒った主人の黒騎士が女性に報復したことを知る。Percyvell は黒騎士との戦いに勝利を取めるが、女性が慈悲

を乞うたために騎士の命を奪うことはなかった。そして交換した指輪がすでに黒騎士の主人であり、Gollrotherameの兄弟である大男の手に渡ったことを知る。

Percyvellはその領主のもとへと急ぐ。二人は激しい戦いを繰り広げるが最終的にPercyvellが大男を倒して首を切り落とす。その首を持って大男の城へと向かったPercyvellは門番の助けを借りて指輪を見つける。さらに門番から近くに住む女が指輪を見て発狂してしまった話を聞いたPercyvellはそれが母親であると悟り、母親と別れた時と同じ服装をしてその発狂した女性を探して森を彷徨い歩いた。9日目、かつて水飲み場にしていた泉にたどり着き、そこで母親に遭遇する。Percyvellは母親を捕まえると大男の城に連れ帰り、大男が用意していた薬を与える。三日三晩の看病の末に母親は治癒し、Percyvellは母親と共にLufamour嬢の待つ城へと帰った。その後Percyvellは聖地へと赴き多くの都市を征服するが、そこで命を落とす。

2. 中英語騎士文学における牝馬

PercyvellはArthur王の宮廷に向かうため牝馬を調達しているが、ChrétienのPercevalの物語を読んだことがある者ならば、GauvainとOrgueilleuse de Logresのやり取りを思い出すかもしれない⁸⁾。R.H.C. Davisによれば⁹⁾、中世ヨーロッパにおいて牝馬が戦争で用いられることはなく、良質な牝馬は飼育場で飼育され、それ以外の牝馬は聖職者や女性用として用いられていた。騎士の乗る馬は常に“stallion”「去勢されていない成熟した牡馬」であった。このことは、1066年に起きたノルマン・コンクエストの経緯を描いたBayeux Tapestryから読み取ることができる。征服王ウィリアムの乗る馬の刺繍には勃起した生殖器があしらわれている。Joyce E. Salisburyは去勢していない牡馬だけを戦闘に用いることの実用性を認めな

からも、一方で牡馬の利用はより象徴的な意味合いを持ち、征服王ウィリアムの騎乗する馬の勃起した生殖器はウィリアム自身の力強さと男性性を表していると指摘している¹⁰⁾。このように現実の社会において、去勢されていない成熟した牡馬は、乗り手の男性的な特徴のシンボルとなり、また戦闘に適しているという実用性のために選ばれ、牝馬が戦闘や乗用馬に用いられることはなかった。

たとえ中世社会において騎士が牝馬に乗って戦うことがなかったとしても、牝馬が登場する文学作品は少なからず残されている。多くの中英語文学で描かれる騎士の乗る馬が去勢されていない成熟した牡馬だと明示されることはほとんどない。騎士の乗る馬が牝馬のはずがないという暗黙の了解があったのだろう。一方で牝馬が作品中に描かれる時には、必ずそれが牝馬であることが明示されている。この事実は牝馬を作品のモチーフとして用いること自体に何らかの意味があることを示唆している。ここでは中英語で書かれた作品の中に登場する牝馬の描写をいくつか取り上げて、その役割や意義について考察する。

リチャード1世の十字軍遠征を描いたロマンス *Richard Coer de Lyon* では魔法によって悪魔がその姿を変えた牝馬が登場する。*Richard Coer de Lyon* は騎士 Richard の登場する物語であり、ヨーロッパの価値観を基に異教の王 Saladin に滑稽な人物像を与え、宿敵を愚弄する目的で牝馬が利用されていた可能性がある。Saladin は Richard に一騎打ちを提案し、Richard もそれを受け入れる。Saladin は Richard を倒すために策略を練り、2匹の悪魔を捕まえると魔法を使って一方を牝馬に、もう一方を若い牡馬にその姿を変えさせた。そして若い牡馬を Richard が乗るように仕向け、Richard の馬が自分の乗る牝馬の乳を吸おうと身をかかめようとした瞬間に Richard を殺そうと Saladin は計画した。

Tabours beten, and trumpes blowe;
 Pere myȝte men see in a þrowe
 How Kyng R., þe noble man,
 Encountryd wiþ þe Sawdan,
 Pat cheef was told off Damas.
 Hys trust vpon his mere was.
 Perffore, as þe book vs telles,
 Hys crouper heeng al ful off belles,
 And hys peytrel, and his arsoun:
 Pree myle men myȝten here þe soun.
 His mere gan nyȝe, here belles to ryng,
 Ffor gret pryde, wiþouten lesyng.
 A brod ffawchoun in honde he bar,
 Ffor he þouȝte he wolde þar
 Haue slayn Kyng R. wiþ tresoun,
 Whenne his hors hadde knelyd doun
 As a colt þat scholde souke; (ll. 5747-63)¹¹⁾

乗り手の力強さを象徴する馬に乗ることが求められた中世ヨーロッパの価値観に従えば、Saladinはその力強さを象徴できない牝馬に乗っており、嘲けりの的になったことだろう。さらにSaladinが彼の牝馬に信頼を寄せる（“Hys trust vpon his mere was.” (l. 5752)）という表現は特に印象的で、騎士が牝馬には決して乗らない社会に住む人々の嘲笑を誘う効果的な描写である。その一方で、話の筋書きは悪魔の登場や魔法による変身などの要素が含まれており明らかなフィクションであるものの、ヨーロッパ以外の地域では戦闘に牝馬や去勢された牡馬が用いられていた事実を考慮すると¹²⁾、この

場面はイスラム圏の騎馬文化を端的に反映していると捉えることもできる。ヨーロッパ外の慣習に疎い聴衆にとっては、牝馬に乗る憎むべき異教徒の王の姿は格好の笑いの種になっていたに違いない。それと同時に、イスラムの人々の習俗に精通した聴衆や現代の読者は、Saladinが牝馬に乗る場面に当時のイスラム教徒の戦士たちの実際の姿を反映した文化的な意義を見出すこともできる。

Richard Coer de Lyon は多くの騎士や異教の戦士が登場する騎士物語であったが、一人も騎士の登場しない *Tournament of Tottenham* でも牝馬が用いられており、この作品は一般の人々と馬との関係を伝えている。*Tournament of Tottenham* は15世紀に書かれた250行ほどの短い作品で舞台をロンドンにほど近いトッテナムという町とし、“Tournament”「馬上槍試合」というタイトルが付けられているが、被支配層に当たる“the swete swinkers”「汗臭い労働者」連中を主な登場人物としている。土地の代官Randolfの娘をかけた馬上槍試合の開催が決まり参加者たちは各々準備を始め武具や武器の他に馬が必要になると、良い馬を持たない者は牝馬を用意したと叙述されている。参加者の一人Dudmanは自分の馬を自慢するような発言をして次のように話す。

“I vow to God,” quod Dudman, and swor be the stra,
“Whyls me ys left my mere thu getis hur not swa;
For scho ys wele schapen and lyght as the ro,
Ther ys no capul in thys myle befor hur schal go.
Sche wil me nocht begyle:
She wyl me bere, I dar wele say,
On a lang somerys day,
Fro Hyssylton to Hakenay,

Noght other half myle.” (ll. 127-135)¹³⁾

この作品の校訂者である Erik Kooper は少なくとも戦いの場で男が牝馬に乗ることはない注釈を付けているにもかかわらず¹⁴⁾、男たちは牝馬に乗って戦い始める。一見するとその類似性はわかりにくい、この作品における牝馬と参加者たちの描写はいくつかの点で *PG* における Percyvell と牝馬の描写に似ている。牝馬を指す際に代名詞の女性形を用いることで文法的にもその馬が牝であることを繰り返して明示していることや¹⁵⁾、*“She wyl me bere”* (l. 132) という言い回しは *PG* においてもよく似た表現が使われている¹⁶⁾。14世紀前半にはすでに成立していた *PG* が、明らかな笑い話である *Tournament of Tottenham* を真似たということはあるが、その逆はあるかもしれない。また Dudman 同様他の参加者たちの階級や彼らが身に付ける殻竿や篩、熊手や馬鍬、捏鉢や木べらといった武具一式、さらには騎士の馬上槍試合を模した方法で婚約者を決めるという筋書きを考慮すれば、*“For scho ys wele schapen and lyght as the ro,/ Ther ys no capul in thys myle befor hur schal go.”* と彼の乗る牝馬を自慢する Dudman の言葉は、騎士物語に登場する騎士が自分の馬に信頼を置く様子を模したパロディーであることに疑問の余地はない。騎士の馬上槍試合を茶化した作品において牝馬に乗る登場人物は多様な職業につく社会の底辺にいる者たちであり騎士ではない。*PG* のように牝馬の登場が滑稽な雰囲気を作り出すことはないだろう。この作品において、牝馬と登場人物たちとは当然の如く関連付けられており、職人や商人、農民たちが乗用馬や荷馬として一般的に広く利用していた牝馬は、中世社会における貧しい人々の日常生活の一部を垣間見せる舞台装置としての役割を担っていると考えられる。

中世の貧民が牝馬を利用していたことを映す文学作品は他にもある。Sir Thomas Malory もまた牝馬を作品に登場させており、私たちはそこに中世

の農民の暮らしぶりを覗き見ることができる。Arthur 王と Guenevere 王妃の婚礼の日、一人の若者を連れた貧しい男がやってくる。

Forthwithall there come a poore man into the courte and brought with hym a fayre yonge man of eyghtene yere of ayge, rydyngge uppon a lene mare. (p. 61)¹⁷⁾

Pellinore 王がこの男の妻に産ませた子 Tor は、やせ細った牝馬に乗ってやってきた。Merlin によって Tor の出生の秘密が知らされると、Percyvell がそうであるように、Tor にとってもこの馬への騎乗は分不相応であることがわかる。そのため、一見すると諧謔を目的とした牝馬の使用という意図を考慮する必要があるように思える。しかし、その可能性は「一人の貧しい男」の引率によって除外される。なぜなら、Tor の乗る「瘦せ細った牝馬」は彼の育った環境や彼を Arthur 王の宮廷に連れてきた育ての親の経済状況に相応しいからである。この場面もまた騎士物語の中に垣間見える中世の貧しい人々の日常の断片である。

最後に中世から近代初期に至るまで人気を博していた作品 *Ipomadon* について考察する。この作品は、PG の描写によく似た主人公 *Ipomadon* と牝馬とのやり取りが描かれる場面があり、騎士物語における牝馬の役割を理解する上で極めて重要である。フランス王 Catryus の戦争に加勢していた *Ipomadon* は、兄弟が和解するとすぐにフランスを出る。すると Calabria に派遣していた従兄弟 *Egyon* と出会い、愛する女性 *Fere* が大インドの *Lyolyne* の攻撃を受け結婚を迫られていることを知る。*Fere* 救援のため *Ipomadon* は素性を隠して *Mellyagere* の宮廷のある Sicily に向かう。かつて *Mellyagere* の宮廷に仕えていたことのある *Ipomadon* は道化のような格好をして素性を偽るのだが、この時彼が乗っている馬は、Tor が乗っていた馬同様、歳

をとってやせ細った牝馬である。

His hors myght vnnethe goo for lene,
Hit was an old crokyd meyre: (ll. 6239-40)¹⁸⁾

Le Morte D'Arthur に描かれる Tor の登場シーンとよく似ているが、決定的に違うのは Ipomadon が誰も伴わず一人で宮廷を訪れていることにある。Tor が Arthur の宮廷を訪れた際には貧農の両親を伴っており、Tor の乗る馬は両親の生活水準と照らし合わせてみても違和感を覚えない。しかし騎士として Mellyagere の宮廷を訪れたボロを着て貧相な牝馬に乗った Ipomadon の容姿は騎士に相応しい身なりというよりは、Tor のように貧しい農民のそれである。みすぼらしい格好で Mellyagere の宮廷を訪れた Ipomadon が、この宮廷に降りかかる最初の戦いを自分に任せるという条件で宮廷に迎えるよう要求すると、紆余曲折があったものの最終的に Mellyagere はその哀れな騎士を受け入れる。そして Ipomadon は自分で馬の世話をすると行って動き始める。

'My hors mysellff kepe I will,'
He sayd, 'Come hedyr to me, Gille!'
Then loughe they all arighte.
He shovyd the waykyr wyth his [arm] e
Euery man sayd, 'It were grett harme
And we had forgone this sighte!' (ll. 6421-26)

この素性を隠した騎士の馬には“Gille”という名前が付けられていた。Ipomadon がその名を呼ぶと、その様子を見ていた者たちが一斉に笑い出

し、このみすばらしい男に対して侮蔑の言葉を吐いている。PGにおける牝馬と Percyvell のやり取りが描かれる場面は後で詳しく見ていくが、Percyvell も Ipomadon 同様に捕まえた牝馬に言葉をかけている描写があり両者は類似している。武勲を成し榮譽を手に入れた Ipomadon であったとしても素性がわからなければ、痩せ細った牝馬に乗り馬の名前を呼ぶ姿は周囲の人間の嘲笑を誘う行為であることがこの場面から明らかになる。だからこそ Ipomadon はかつて滞在していた Mellyagere の宮廷において自身の素性を隠すことができたとも言える。

これまで検討した中英語作品は、牝馬というモチーフが持つ役割の多様性を示している。*Richard Coer de Lyon* において、一方では騎手を愚弄する目的で、他方では異国の文化を反映させる目的で牝馬が用いられている。*Tournament of Tottenham* や *Le Morte d'Arthur* の Tor の登場場面では、通常は決して物語の主人公になることのできない民衆や貧しい人々の生活の一部を描き出すものとして牝馬を捉えることができる。そしてすでに指摘したように、Eckhardt は武勲詩において牝馬が担う役割について言及しながら Percyvell が妊娠した牝馬に乗ることの滑稽さを指摘している¹⁹⁾。Ipomadon が牝馬に乗って Mellyagere の宮廷を訪れた際の人々の反応を見ても明らかなように、騎士がそれに乗って現れると嘲けりと笑いを巻き起こした。このような文脈で登場する牝馬は、高貴な生まれの Percyvell にとっては相応しい旅の相棒ではない。当然牝馬に乗った Percyvell は嘲笑の的であり、その描写を思い浮かべながら物語に耳を傾けている中世の人々はうすら笑いを浮かべていたであろう。

3. Percyvell と牝馬

中世ヨーロッパにおいて通常牝馬が戦いの場で用いられることはない。それは女性や聖職者が乗る馬であり、また被支配層である農民などが耕作

や運搬に用いることが一般的であった。文学の世界に目を向けてみても、牝馬は異教徒と共に描かれたり、貧しい人々と結び付けられている。騎士と共に描かれる場合には、Ipomadonのように何かしらの目的を持って意図的に牝馬に乗っているにせよ、Percyvellのように無知のために無自覚に牝馬に乗っているにせよ、乗り手は周囲の人々から愚弄されることとなる。

しかしPercyvellと牝馬のやり取りが描かれる場面をよく観察すると、その圧倒的な喜劇性の背後にもう一つの重要な役割があることに気付く。これまで見てきたように、牝馬への騎乗は嘲笑の対象であり、不名誉な行為であるため、生前武勲をたてた父親と王族の血を引く母親Acheflourの間に生まれたPercyvellが乗る馬として牝馬は適当ではない。こうした社会背景や文学伝統がPGに滑稽譚としての性格を付与する一方で、Percyvellの馬を選ぶ基準や牝馬への配慮や世話といった無意識のうちに取る行動は彼の生得的な騎士の資質を示唆している。

主人公の騎士としての資質を読み取ることのできる最初の描写は、Gawainたちと森の中で偶然出会った後に母親のもとへ帰る途中、Percyvellが馬の飼育場を訪れた場面にある。森の中で初めて見る騎士と別れたPercyvellは家路につくとその途中で牝馬と仔馬が飼育されている放牧地にやってきた。

The childe hase taken hym till
 Forto wende hame.
 And als he welke in the wodde,
 He sawe a full faire stode
 Offe coltes and of meres gude —
 Bot never one was tame;
 And sone saide he, 'Bi seyne John,
 Swilke thyngis as are yone

Rade the knyghtes apone —
Knewe I thaire name.
Als ever mote I thryffe or thee,
The moste of yone that I see,
Smertly schall bere mee
Till I come to my dame.’

He saide, ‘When I come to my dame
And I fynde hir at hame,
Scho will telle the name
Off this ilke thyng!’
The moste mere he thare see
Smertly overrynes he,
And saide, ‘Thou sall bere me
Tomorne to the kynge.’ (ll. 323-344)²⁰⁾

少年は目の前にたくさんいる動物の名前はわからないものの、その動物が
つい先程出会った騎士たちが跨っていた動物であることは認識している。
そして、数多くいるはずの馬の中から一頭を選ぶ。牝馬と仔馬しかいない
飼育場から騎士に相応しい去勢されていない成熟した牡馬を探し出すこと
はできない。まして馬の良し悪しについての知識を持ち合わせているはず
もない。そこで Percyvell が馬を選ぶ基準としたのが、その大きさであっ
た。334行目 “moste” は名詞として用いられており、現代英語の “large,
big, much” などの意味に対応する形容詞 “much” の最上級の形である²¹⁾。
また341行目 “moste” は名詞 “mere” を修飾する形容詞の最上級である。
詩人は2スタンザにわたって主人公の少年が捕まえた牝馬が最も大きい馬

であったことを繰り返し述べて強調している。また334行目の例は主人公の少年に直接語らせた内容であり、少年が自分の意図を間違いなく実行したことを追認するような形で、341行目の例は語り手の言葉として事実を伝えている。

飼育場には騎士が乗るに相応しい戦馬に適した去勢されていない成熟した牡馬はおらず牝馬と仔馬しかいないのだが、この場面においては牝馬を選んだことだけでなく、詩人が繰り返し強調する一番体の大きな馬を選んだ事実に注目すべきである。単に移動手段としての馬を必要としているのであれば、たまたま通りかかった飼育場の中でも近くにいた馬や捕まえやすそうな馬を選べば事足りる。しかし、この少年はあえて一番大きな馬を選んだのである。この「一番大きな」体の馬を選ぶ少年の無意識の行動が彼が騎士としての本能によって突き動かされていることを示している。百年戦争初期に活躍したフランスの騎士 Geoffroi de Charney は次のように書いている。

Or est il donques raisons que...nous parliens du droit entier estat qui est et peut estre en plusieurs gens d'armes, ainsi come vous pourrés oïr ci après ensuiant. Ce sont cil qui, de leur propre nature et de leur propre mouvement, des lors que cognoissance se commence a mettre en eulx en leur joennesce, et de leur cognoissance ilz oent et escoutent volentiers parler les bons et raconter des faiz d'armes, voient volentiers gens d'armes armez et leurs harnois, et si voient volentiers beaux chevaux et beaux coursiers; et ainsi come ilz viennent en aage, si leur croist leur cuer ou ventre et la tres grant volenté qu'ilz ont de monter a cheval et d'eulx armer.

...it is now time to speak of the truest and most perfect form which exists and is to be found in a number of men-at-arms, as you can learn in what follows. It is embodied in those who, from their own nature and instinct, as soon as they begin to reach the age of understanding, and with their understanding they like to hear and listen to men of prowess talk of military deeds, and to see men-at-arms with their weapons and armor and enjoy looking at fine mounts and chargers; and as they increase in years, so they increase in prowess and in skill in the art of arms in peace and in war; and as they reach adulthood, the desire in their hearts grows ever greater to ride horses and to bear arms.
(pp. 100-1)²²⁾

Charnyの著書によれば、騎士となる者は物心ついた時から美しい乗用馬や軍用馬を眺めることに喜びを感じ、成長するにつれて馬に乗りたいと強く欲するようになる。このCharnyの言説を反映するかのような描写が14世紀の騎士物語 *Octovian* にはある。パリの商人Clementの手で育てられていた皇帝Octovianの息子Florentは、育ての父に使いを頼まれて兄弟のもとに金を届けに出かけた。その途中、立派な白い馬に出会ったFlorentは、その馬に目を奪われてしまう。

As þe chylde þorow þe cyté of Parys yede,
He sye where stode a feyre stede,
Was stronge yn eche were;
The stede was whyte as any mylke,
The brydyll reynys were of sylke,
The molettys gylte they were.

Florent to the stede can gone,
 So feyre an hors sye he neuyr none
 Made of flesche and felle. (ll. 710- 8)²³⁾

結局 Florent は預かったお金をすべてつぎ込んで、その馬を買い取ってしまった。私たちは Florent が手に入れた馬が戦馬であることを語り手の言葉からしか知ることはできない。Florent 自身もこれに続く場面で “stede” という語を使用していない。それでもパリの街で商人の息子として暮らしていた Florent であれば、Percyvell とは異なり当然馬を見た経験はあるだろう。 *Tournament of Tottenham* を参考にして中世の人々の生活を考慮すれば、彼がそれまで見てきた馬はそのほとんどが牝馬や駄馬ばかりであったに違いない。Florent は騎士に相応しい戦馬とそれ以外の馬との違いを容易に見分けることができたはずだ。何より、馬の購入に40ポンドという当時の戦馬の購入費用に相当する金額を支払っていることが²⁴⁾、Florent がこの馬を “stede” と認識していることを物語っている。Charny が解説するように、皇帝の血を引く Florent は商人に育てられていながらも、本能的に美しい馬 “beaux chevaux et beaux coursier” に魅了され、その馬を手に入れたいと願ったのである。

Chrétien の Perceval や Florent とは違い、中英語版の Percyvell はそれまで馬を見たこともなければ、その名前さえ知らない。それでも移動のみが目的であれば一番大きな馬を捕まえる必要のない彼が、敢えて一番大きな馬を選んだことには意味がある。牝馬と仔馬しかいない飼育場という限定的な環境で、馬を一度も見たことのない社会と完全に隔絶された環境で育った Percyvell にとって Charny の言う “beaux chevaux et beaux coursier” を判断する基準はその動物の大きさ以外にはなかったのであろう。このように考えると、Percyvell は一番大きな牝馬を捕まえることによって、Florent

のように、本能的に “beaux chevaux et beaux coursier” を選んだと言えよう。

さらに Percyvell が牝馬を捕まえる場面では Charny が述べる “la tres grant volenté qu'ilz ont de monter a cheval” を Percyvell の言葉の中に読み取ることができる。15歳になるまで森の中で動物を狩って過ごしていた Percyvell の移動手段は自分の足だけであった。それが初めて騎士と出会い、騎士に憧れを抱いた15歳の少年にとって馬に乗りたいという衝動は抑えることはできるはずもない。Percyvell が一番大きな牝馬を捕まえた直後に発する “Thou sall bere me/ Tomorne to the kyng.” (ll. 343-4) は、Charny の言う「馬に乗りたいという強烈な欲求」を体現しているように見える。助動詞 “sall” には極めて広範な意味を表すため文脈に頼った判断が求められ、この場面では多様に解釈することができる。Percyvell が王の宮廷に向かうのは翌日のことなので単純未来を表していると考えられる²⁵⁾、また少年が馬が自分を乗せることを当然と考えているのであれば、義務や命令、極端な見方をすれば脅迫や警告といった意味合いをこの助動詞は持つことになるだろう²⁶⁾。さらに話し手の意志や決意、信頼、確信といった感情を読み込むことも可能である²⁷⁾。特に助動詞 “sall” を最後の意味で解釈した場合には、Percyvell の言葉には馬に乗って王の宮廷に行くという意志が込められることになり、Percyvell の言葉は騎士の資質を持つ子供が抱く “la tres grant volenté qu'ilz ont de monter a cheval” が暗に示されている。

またたとえ Percyvell の牝馬に対する語りかけが騎士としての資質を備えた少年が内に秘める騎乗への熱烈な欲求を示すものではないとしても、この場面は *Sir Beues of Hamtoun* の主人公が愛馬 Arondel に対してその信頼を言葉にする場面を想起させる²⁸⁾。作品の持つ喜劇性という側面を強調するのであれば、Percyvell が牝馬に話しかける様子は周囲の嘲笑を誘った Ipomadon の痩せ細った牝馬を話しかける描写に近く、聴衆の笑いを誘う

詩人の意図を読み込むことができる。同時に Percyvell の “Thou sall bere me/ Tomorne to the kyng.” は、騎士が馬を信頼するという理想的な関係を暗示しているように思える。

少年に騎士として資質が生来備わっていることを示す役割は、Percyvell の良い馬の判断基準や馬への語りかけだけに見られるものではない。家に帰ってきた息子を見た時の母親 Achefflour の反応は、牝馬がその役割を担っていることを示す明確な証拠である。Percyvell が一番大きな牝馬を捕まえ騎乗して家に帰ると、母親はすぐに息子の異変に気付いた。

Scho saw hym horse hame brynge;
 Scho wiste wele by that thyng,
 That the kinde wolde oute sprynge,
 For thyng that be moughte. (ll. 353-6)

馬に乗る我が子を見た瞬間に母親は “the kinde wolde out sprynge” であることを悟っている。Achefflour がそう悟ったのは、Percyvell が森の中で騎士と出会い、話をしたことを聞いたからではない。息子が Arthur 王のもとに行きたいという意思を口にしたからでもない。“by that thyng” とあるように、Percyvell が馬に乗って家に帰ってきたからなのである。彼女の息子が乗っていた馬は騎士が乗る馬としては相応しくない。Arthur 王の妹である彼女は当然騎士の慣習や規則を熟知していた。彼女も牝馬に乗ることの意義はよく理解しているはずだ。しかし彼女にとって馬を連れ帰った息子の姿には父親の面影がある。馬に乗る Percyvell の姿は、たとえそれが牝馬であったとしても、少なくとも母親にとっては、息子に備わった騎士としての資質の顕現を示すものに他ならなかったのである。

Percyvell とこの牝馬との関係が彼が生まれながらにして騎士であること

を示す場面はもう一つある。牝馬と共に家に帰った Percyvell は森であった出来事を母親に話して、Arthur 王に騎士にしてもらうために翌日家を出ることを告げる。母親は外の世界や礼儀作法の知識が全くない息子に対して、“Loke thou be of mesure” (l. 398), “thou meteste with a knyghte,/ Do thi hode off, I highte,/ And haylse hym in hy.” (ll. 403-5) と外の世界でうまくやっていくための最低限の知識を与えた。Percyvell はクリスマスの日に家を出発し、その途上である館にたどり着いた。館の中には火の入った暖炉のそばに大きな台座が設けられており、さらに Percyvell は穀物の入った飼いの葉桶を見つけた。

A mawnger ther he fand,
Corne therin lyggande:
Therto his mere he bande
With the wythy.
He saide, ‘My modir bad me
That I solde of mesure bee;
Halfe that I here see,
Styll sall it ly!’

The corne he partis in two
(Gaffe his mere the tone of thoo)
And to the borde gan he goo,
Certayne that tyde. (ll. 441-452)

そこに自分の乗っていた牝馬の手綱を結び付ける。不意に出発前の母親の助言を思い出した Percyvell は「節度よくいなければならない」と呟いた。

すると、Percyvell は飼い葉桶に入っていた穀物をちょうど半分に分けて、彼の牝馬に与えた。この自分の乗っていた馬に飼葉を与えて世話をする Percyvell の姿こそ、少年の騎士としての資質を示す描写の一つである。

Eckhardt は母親の言いつけを守って目の前にある食物をちょうど半分にして一方を食べてもう一方を残す行動を滑稽な描写だと指摘して、この描写と対応する Chrétien の Perceval の姿を比較して、特に母親の言いつけに文字通り従うことによってこの場面の喜劇性が作り出されていると論じている²⁹⁾。そして Percyvell の純真さや質朴さを代償にしても、中英語の翻案者は滑稽さを追求したのだと彼女は続けている³⁰⁾。しかし古フランス語版の原典と中英語版との違いは、食料をちょうど半分に分けるという Percyvell の「節度ある」行動だけではない。Percyvell は自分の乗っていた馬に食事を与えている。Chrétien の Perceval は中英語版の館に対応するあるテントを訪れた際に自分の乗る馬を顧みることはない³¹⁾。さらに言えば、Wolfram von Echenbach の Parzival も Orilus de Lalander のテントを訪れた時には、自らの欲望を満たすことにのみ執心している³²⁾。確かに母親の言いつけを守り、飼葉桶に入った馬の餌を半分にして与える Percyvell の行動は衝撃的で、聴衆の笑いを誘うには十分なほどの滑稽な光景である。しかし Perceval や Parzival とは違い、Percyvell は自分が乗ってきた牝馬に飼葉を与えており、少年の馬への配慮が感じられる。自分の乗る牝馬への気配りは、母親の言いつけに従い食べ物をきちんと半分に分けてしまう少年の行動が醸し出す強烈なユーモアによって霞んでしまうが、Chrétien や Wolfram が主人公の馬の世話に一切言及していない点を考えれば、母親の言いつけを忠実に守る印象的な Percyvell の純朴さと同様に少年の馬の世話はこの場面の重要な特徴である。

Percyvell の牝馬の世話が持つ意味は13世紀の聖職者 Ramon Llull が著した *The Book of the Order of Chivalry* が明らかにしてくれる。馬の世話をする

ことは騎士にとって手を抜くことの許されない仕事の一つであった。Llullによれば、騎士の息子は従者であるうちから馬の世話の仕方を覚える必要があり、食卓において料理を切り分ける作法や馬の世話の仕方を覚え、またその他騎士の名誉に関わるあらゆることを学ぶために父親は自分の息子を他の騎士に預ける義務がある³³⁾。さらにLlullは、他の箇所では“keeping his harness lustrous, and ministering to his horse is the office of the knight.” (p. 53) と馬の世話に関する言及を繰り返してその重要性を強調している。

このような資質は中世の騎士物語において主人公が騎士に叙任される前に顕現することがある。先に引用した *Octovian* に登場する Florent にもその資質が現れ、誰に教わるでもなく馬の世話をして見せた。見事な馬を手に入れた Florent は父親の使いも果たさずに、その馬に乗って家に帰ってきてしまった。Florent はすぐに馬を家の中に引き入れて、世話を始める。

The chylde soght noon odur stalle,
But sett hys stede yn the halle
And gaue hym corne and haye.
And sethyn he can hym kembe and dyght
That euery heer lay aryght,
And neuyr oon wronge lay. (ll. 739-744)

商人の息子として育てられていた Florent が、騎士としての教育を受けな
いままに馬の、しかも軍馬の世話をこなしてしまうことは、Florent の遺伝
子の中に騎士として必要不可欠な資質が刻み込まれていたことを示してい
る。馬の世話をすることは騎士の務めであった。馬に食事を与えて毛並み
を整えるという Florent が手に入れたばかりの馬を世話する様子を描いた
場面は、先に引用した騎士の資質を示す特徴の一つである見事な馬に魅了

されてしまう様子を描いた場面の直後に配置されている。Charny が解説している騎士になるべき少年に潜在する特徴が Florent の美しく立派な馬に魅了され手に入れる場面には描かれ、Llull が繰り返し強調した騎士の果たすべき務めを適切な教育を受けずにこなしてしまう Florent の姿が馬の世話の叙述にはある。これらの場面が商人に育てられた Florent の秘められた騎士の資質を暗示する目的で描かれていることに疑う余地はない。

この Florent が馬の世話をする場面と Percyvell が母親の言いつけを言葉通りに守る滑稽な場面とは、馬に食料を与えるという点において共通している。すでに述べたように、馬を養う主人公の様子を Chrétien や Wolfram は彼らの作品の中に描いていない。Percyvell が騎士としての教育を受けずに騎士の務めである馬の世話を誰に指示されるでもなく当然のように全うしてしまう姿は Florent の姿に重なる。私たちは Percyvell が飼葉を半分に分けて牝馬に与えるユーモラスな場面にはばかり目を奪われがちであるが、飼葉を与えて馬の世話をする Percyvell の姿は、騎士としての教育も受けず、それまで馬を見たことさえなかった少年が騎士としての義務を果たしている姿であり、この場面もまた少年の生得的な騎士としての資質を私たちに伝えていることを見逃してはならない。

中世ヨーロッパの文化や中世の文学伝統を考慮しても、Percyvell と牝馬とが描かれる場面は間違いなく作品のコミカルな雰囲気を作り上げることに大きく貢献している。しかし騎士と牝馬の関係が創り出す喜劇的な性格と共に、一番大きな馬を選び、その馬を信頼し、世話をするという一連の Percyvell の行動は、騎士としての資質が少年に生まれながらにして備わっていることを示唆している。PG における牝馬の役割は主人公の滑稽な人物像を作り上げ、作品に喜劇性を加えることだけではなく、主人公が生まれながらにして騎士であることを暗示する役割も果たしている。中英語文学における牝馬の役割を考慮すると、PG に登場する牝馬が持つこの二重の機

能は、その中に相反する騎士の人物像を形成する役割を一手に引き受けている点において、殊の外珍しいものであると言えよう。

結 び

Sir Percyvell of Gales において牝馬は主人公の無知で素朴な性格を強調して面白可笑しい作品の創作に貢献するだけでなく、主人公の少年に秘められた騎士としての資質を暗に示す役割を担っている。馬を見たことのなかった少年は、14世紀のフランスの騎士が解説した内容とは若干の差異はあるが、最上級の馬を選んでいる。馬に話しかけた少年の言葉からは、馬に乗るといふ少年の強い意志を感じる。少なくとも、中世の騎士物語の主人公たちが見せる馬への信頼を読み取ることにはできるだろう。そして少年は騎士の重要な義務である馬の世話も決して忘れない。少年 Percyvell と牝馬との関係が描かれた場面には、不可欠な資質を備えた理想的な騎士の少年期の姿が描かれている。

それでもやはり、ユーモアに溢れた *Sir Percyvell of Gales* は滑稽譚である。中世における牝馬は異教徒や貧しい人々と関連付けられている。騎士が牝馬に乗ることは、Lancelot が荷車に乗り、Gauvain が醜く老いさらばえた駄馬に乗ったことに類似する意味合いがあったことだろう。Percyvell が牝馬に乗る姿を思い浮かべながら、騎士道や馬術に関する知識を持っていた聴衆や読者は笑いを堪えることが難しかったはずである。しかし、Percyvell の行動を滑稽にしている要因を、少年の無知で純朴な性質や牝馬の背景にある文学的な慣習だけに求めることはできない。*Tournament of Tottenham* が職人や農民たちを使って馬上槍試合での騎士の姿や行動を模してロマンスに描かれるような騎士の世界をパロディー化したように、*Octovian* のような騎士物語で描かれるような騎士の資質を備えた少年の姿を牝馬を用いてパロディー化したのが Percyvell の姿ではないか。騎士物語には相応しく

ない牝馬を登場させているが、Percyvellの行動は*Octovian*に描かれるFlorentの物語のように典型的なロマンスの筋書きである。牝馬を使って典型的なロマンスにおいて描かれる騎士の資質を備えた少年の姿を描くことが、換言するとそれらしいロマンスとして描くことが、無知と純朴さ由来する少年の言動の滑稽さをより強調して、古フランス語ロマンスを原典とする中英語アーサー王ロマンスを優れた喜劇にしていると言えよう。

注

- 1) Putter, Ad., "Story Line and Story Shape in *Sir Percyvell of Gales* and Chrétien de Troyes's *Conte du Graal*," *Pulp Fictions of Medieval England: Essays in Popular Romance*, edited by Nicola McDonald, Manchester UP, 2004, p. 171.
- 2) Saul, Nigel., *For Honour and Fame: Chivalry in England 1066-1500*, Pimlico, 2011, pp. 308-9.
- 3) Fowler, David C., "Le Conte du Graal and *Sir Perceval of Galles*," *Comparative Literature Studies* 12 (1975), pp. 5-20; Busby, Keith., "Sir Perceval of Galles, Le Conte du Graal, and *La Continuation-Gauvain*: the Methods of An English Adaptor," *Études Anglaises* 31: 2 (1978), pp. 198-202; Busby, Keith, "Chrétien de Troyes English'd," *Neophilologus* 71 (1987), pp. 596-613; Putter, *op. cit.*
- 4) Eckhardt, Caroline D., "Arthurian Comedy: The Simpleton-Hero in *Sir Perceval of Galles*," *The Chaucer Review* 8: 3 (1974), pp. 205-220. Eckhardtは*Conte du Graal*におけるPercevalが徐々に宮廷の社会と同化していくのに対して、本作品でのPercyvellは徹頭徹尾、無知で素朴な田舎者として描かれ続けられていると指摘している。(205)
- 5) Percyvellが自分の乗っている動物の名前を知るチャンスは母親と別れて以降幾度かあったが、結局Lufamour嬢の領土を攻め込む異教の王Gollrotherameとの戦いの最中にGawainに馬から降りるよう指示されるまで、Percyvellは自分が乗る動物を「牝馬」だと考えていた。これは、Gawainから下馬するよう言われた直後にPercyvellが"I wende had bene a mere!" (l. 1691)と言葉を返していることから明らかである。Percyvellが初めて馬を見たのが作品の冒頭300行目付近で作品の長さは2287行あるため、実に作品の半分以上の間、主人公は自分の乗る動物について正しい知識を持っていなかったことになる。
- 6) Eckhardt, *op. cit.*, p. 209.

- 7) *Ibid.*
- 8) Chrétien de Troyes, *Arthurian Romances*, translated by William Kibler, Penguin, 1991, p. 486.
- 9) Davis, R. H. C., *The Medieval Warhorse: Origin, Development and Redevelopment*, Thames, 1989, p. 18.
- 10) Salisbury, Joyce E., *The Beast Within: Animals in the Middle Ages*, 2nd ed., Routledge, 2011, p. 32.
- 11) *Der Mittelenglische Versroman über Richard Löwenherz*, edited by Karl Brunner, Wilhelm Braumüller, 1913.
- 12) Hyland, Ann., *The Medieval Warhorse: From the Byzantium to the Crusades*, Alan Sutton, 1994, p. 93.
- 13) *The Tournament of Tottenham in Sentimental and Humorous Romances*, edited by Erick Kooper, Medieval Institute Publications, 2005.
- 14) *Ibid.*, l. 72n.
- 15) *PG*, l. 347, 369, 704, 735.
- 16) *PG*, l. 343 & 347.
- 17) Malory, Sir Thomas., *Malory Works*, 2nd ed., edited by Eugène Vinaver, OUP, 1971.
- 18) *Ipomadon*, edited by Rhiannon Purdie, OUP, 2001.
- 19) Eckhardt, *op. cit.*, p. 209.
- 20) *Sir Percyvell of Gales*の引用はすべて Maldwyn Millsの校訂版による。(Ywain and Gawain, *Sir Percyvell of Gales, The Anturs of Arther*, edited by Maldwyn Mills, J. M. Dent, 1992.)
- 21) *MED*, sv. “mōst,” *adj.* (superlative) & n. 1a. (a) & 3a. (a).
- 22) Geoffroi de Charny, *The book of Chivarly of Geoffroi de Charny: Text, Context, and Translation*, edited and translated by Richard W. Kaeuper and Elspeth Kennedy, University of Pennsylvania Press, 1996.
- 23) *Octovian*, edited by Frances McSparran, OUP, 1986.
- 24) Davis, *op. cit.*, p. 67
- 25) *Middle English Dictionary* (以降 *MED*), sv. “shulen,” v.¹ 10.
- 26) *MED*, sv. “shulen,” v.¹ 3b., 4a., & 5b.
- 27) *MED*, sv. “shulen,” v.¹ 5a.
- 28) *The Romance of Sir Beues of Hamtoun*, edited by Eugen Kölbing, Kraus Reprint, 1978, ll. 3531–34.
- 29) Eckhardt, p. 210.

- 30) *Ibid.*, pp. 210-1.
- 31) Chrétien de Troyes, *op. cit.*, pp. 389-390.
- 32) Wolfram von Eschenbach, *Parzival and Titurel*, translated by Cyril Edwards, OUP, 2006, pp. 56-9.
- 33) Lull, Ramon., *The Book of the Order of Chivalry*, translated by Noel Fallows, Boydell, 2013, p. 42.

